

ヴァイオリニストTAIRIKUの戯言

〔第13回〕

弦が揺れると、僕は季節の風になる

+ 文 佐田大陸 Text by Tairiku Sada +

ステファン・グラツペリと
ユーディ・メニューイン

まわりにヴァイオリンを習っている人が誰もいなくて、楽器をケースから取り出しただけで「すげー」と言われ、調弦のラの音を出そうもんなら「え、天才じゃない?!」と純朴な友人に恵まれた長野の中学時代。

高校に入っても、専門のヴァイオリニストの名前ですら「ハイフェッツ？ パールマン？ なんか聞いたことある」と、その程度でした。

まわりを見渡せば、英才教育を受けたエリートばかりの中（だからこそ、危機感からくる底知れぬ上昇志向も持ち続けて来られました）、「少しずつヴァイオリニストの知識もついてきて、ステファン・グラツペリのジャズヴァイオリンを初めて聴いた時は心を撃ち抜かれました。「甘い音」は存在するんだなと初めて知りました。ピッチの正確さ、細かなニュアンスを扱うセンス、どれを取っても天才的。

幼少期から「神童」の名をほしいままにした世界的なクラシックヴァイオリンの大家、ユーディ・メニューインは、グラツペリの才能に惚れ込み、お

互い違うジャンルの大巨匠ながら、ジャンルを超えた、斬新なコラボレーションをしました。

譜面ありきのクラシックと、即興の多いジャズは、一見正反対のイメージを持たれがち。

しかし何年前かに、作曲家の宮川彬良さんが「楽譜に規律がしっかりと書き込まれているクラシックの演奏家は自由さを求めて演奏する。ジャズのプレイヤーは自由な即興の中で規律を求めて演奏する。お互い反対な性質を持ちながら、相反する方向へ向かっている」ということを話されていて、深く頷きました。

メニューインとグラツペリの共演は、まさにクラシックとジャズの相反する個性のぶつかり合いが、本当にエキサイティングです。

メニューインがクラシックの演奏スタイルを一切くずさずにジャズをやっている所も、大きな聴きどころの一つと言えるでしょう。

多くの曲が収められている二人のアルバムの中でも、有名な「枯葉」のグラツペリのヴァイオリンの歌い出し

は、一音で心をグツと持っていかれま

す。何度も何度も、亡くなる直前まで同じ舞台上に立ち続けた最高に魅力的な二人です。

2018年秋、激しい時代の移り変わりの中、伝統は衰退し、誰も見たことないほど科学の発展した時代に突入しています。

僕も、グラツペリやメニューインのように、人生の最後を迎える瞬間が一番魅力的な人間でありたいと思います。



profile

2010年3月に桐朋学園大学音楽学部大学院を修了。
2ヴァイオリンとピアノのアンサンブル・ユニット「TSUKEMEN」のヴァイオリニストでリーダー。
2010年キングレコードからメジャーデビュー。
結成9年目にして450本以上の公演を海外や日本全国各地で開催、現在までにのべ35万人を動員している。